

1-3 新タイプのさまざまな指輪

大正前期には、これまで紹介した指輪以外にもさまざまなタイプの指輪があった。

日本独自の発想による指輪の他、同時代の西洋で流行していた指輪を真似たものもある。その多くは、比較的安価な大衆用指輪として売り出された。

価格も記しておいた。ちなみに、『値段史年表明治大正昭和』によると、これらの時期前後の大正六年の1グラムの金地金は1円36銭、大正四年の18金甲丸指輪（4グラム）は4円70銭（いずれも小売標準価格）。なお大正二―七年の銀行の初任給は40円だった。

紋形指輪

家紋を、縫り線よで加工された腕の上に付けた指輪（図1-3-1）。家紋は明治時代頃までは簪に多く見られるが、その指輪への応用である。この紋形指輪は明治末期に登場しているが、多く用いられたのは大正時代になってから。銀製と金製があった。価格は35銭から3円と廉価。けっこう売れたらしく、この小間物店は大正五年には更にバラエティーを増やして金製指輪（9金、18金）を売り出している。価格は1円80銭から3円（図1-3-2）。



図 1-3-1

紋形指輪

伊勢竹小間物店

大正元年9月『演芸画報』

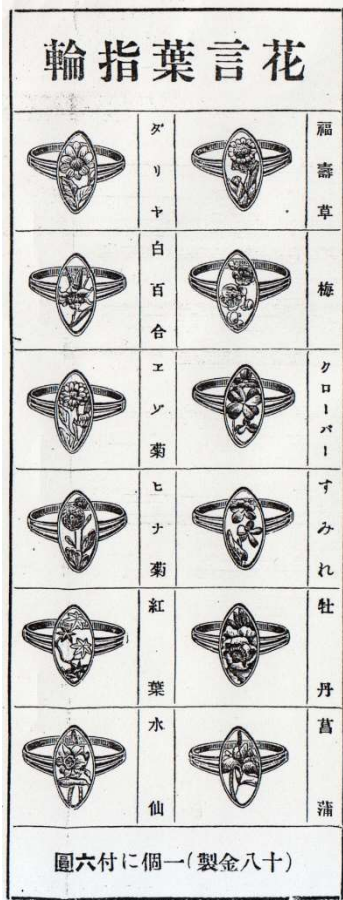


図 1-3-3
花言葉指輪
三越呉服店

大正 2 年 10 月『みつこし
タイムス』臨時増刊第 11 卷
第 13 号より

花言葉指輪
三越が「十二ヶ月指輪」のヒットに続いて発売した指輪(図 1-3-3)。
花にプラチナを交えた 18 金製の可憐な指輪 12 種で、1 個 6 円。
花には、福寿草—幸運、梅—貞節、クローバー—福運、すみれ—
謙遜、牡丹—富貴、菖蒲—温情、ダリア—感謝、白百合—潔白、蝦夷
菊—確信、雛菊—平和、紅葉—赤心、水仙—尊敬、とそれぞれ花言
葉を付けている。



図 1-3-2
紋形指輪
伊勢竹小間物店
大正 5 年 11 月『演芸画報』



図 1-3-5
引き結び形 (花結び)
指輪
三越呉服店
大正 2 年頃『みつこ
しタイムス (臨時増
刊) 第 11 卷 9 号付
録』より

引き結び形指輪
丸線状の地金を引き結んで作った結び形指輪 (花結び) (図 1-3-5)。18 金製で 4〜5 円程度と手頃な価格。
ヘラクレスノットなどと呼ばれ、絆や愛を象徴する指輪として現代でも用いられることがあるが、日本でも大正初期には発売されていた。西洋由来のようにも思えるが、日本でも帯締めや祝事に進物を結ぶ水引にこの結び方も使うので、必ずしもそうとは言えない。



図 1-3-4
十二支指輪
三越呉服店
大正 2 年頃『みつこしタイムス (臨時増刊)
第 11 卷 9 号付録』より
左上から下へ、子 (ね) = ねずみ、寅 (と
ら) = 虎、丑 (うし) = 牛、辰 (たつ) = 竜

十二支指輪
じゅうにし

これも三越が大正二年に発売した 22 金製の彫金指輪 (図 1-3-4)。「子」(ね―ねずみ) から始まる十二支にまつわる 12 の動物を精緻にかたどつてある。価格は 12 円と少し高め。

楽譜の指環

亡くなった明治天皇の功績や徳をほめたたえる楽譜の付いた頌しょう

徳指輪とく（図1-3-6）。

歌は「大政維新の 光さして 眼ねむりは覚めたり古き日本 明治の

帝みかどの御手みてによりて 世界にかどやく国はなりぬ」で、その音符を指

輪りんに配した華奢な作り。価格は4円50銭。小粒真珠入りもあつたよ
うで、こちらは6円50銭。

注文に際しては、「紙を其御指に巻き合せ目を墨にて御しるしの事
又ははがきにて御申入になれば寸法の用紙を無代ですぐ送ります」と
一文が添えられている。



図 1-3-6

楽譜の指環

大西錦綾堂

大正2年9月『婦人世界』

ドイツ製指輪

西洋の指輪も輸入されていた。これはドイツ製で14金張り（図1-3-7）。

ほとんどの指輪に宝石らしきものが入っているが、2円70銭均一
と廉価なので、おそらく模造石だろう。



図 1-3-8
 英字指環 (小粒眞珠入)
 大西白牡丹
 大正 3 年 6 月 『婦人世界』 より

英字指環

今でもありそうな小粒眞珠入りの英字指輪と呼ばれたイニシャル指輪 (図 1-3-8)。

眞珠入り 18 金製で 5 円と価格も手頃。当時としては目新しくお買い得感もあつたものと思われる。

また、同じ頃に大西錦綾堂は、新築落成記念として「花文字指輪」と称して 18 金製の英字指輪を 3 円均一で売り出している (図 1-3-9)。



図 1-3-7
 ドイツ製指輪
 鈴木時計店
 大正 2 年 9 月 『婦人世界』



図 1-3-9
花文字指輪
大西錦綾堂
大正前期雑誌より

ベビーリング

大正初期には子供の誕生を記念する 18 金製の小さな指輪も売り出された。価格は 2 円 50 銭〜 3 円 (図 1-3-10)。特別なデザインではないが、すべて少女好みのルビー入りである (ルビーはおそらく合成石)。広告文で「欧米にては是れを七、八歳の頃より用いられ成長の後も尚記念として永く愛用せらる近時東京にても大いに流行しつつあると宣伝している。」
西洋では主に生まれたばかりの赤ちゃんが洗礼を受ける時の習わしとして始まったものようだが、日本では七〜八歳の少女用として売り出された。



図 1-3-10
ベビーリング
大西錦綾堂
大正 3 年 6 月『婦人世界』より

(コラム 1-11) 女の子用セルロイド指輪

正確に言えば明治時代後期からだが、『日本の宝飾文化史』、大正前期にも引き続き子供用の安価なセルロイド指輪が用いられていた。指輪の習慣は子供にまで広まっていたのである。こういう背景を知ると、**前述の「ベビーリング」**の登場も理解できる。



女の子のセルロイド指輪着用図
大正8年9月『婦人世界』挿絵より

スネークリング（蛇形指輪）

20金製の彫金指輪。価格は28円（**図1-3-11**）。ヨーロッパでは蛇は、古来、再生、長命、賢さのシンボルであり、これをモチーフとする指輪も多く作られている。日本でも一部には蛇は再生と金運アップのお守りとする考えがあり、大正前期にはリアルな蛇形の指輪が作られた。



図1-3-11
スネークリング（蛇形指輪）
天賞堂
大正4年4月『天賞堂営業案内一貴金属装身具之部』より

カチューシャリング

大正三年春、帝国劇場での芸術座公演は、トルストイ作の「復活」。松井須磨子が演じた「カチューシャ」は大正時代の新しい女性像を作りだし、そこで須磨子が歌った「カチューシャの唄」は大ヒットした。

その時、カチューシャの名を冠した便乗商品がいろいろ作られたがカチューシャリングもそのひとつ(図1-3-12)。ルビー、サファイヤ、エメラルドなどの合成または模造宝石を日によって取り替えることができるリングで、石座の下にネジが付いていてそれを台座(腕)にセットする仕組みになっている。銀製、金めっき製、18金製とあり、価格は1円35銭から7円まで。

松井須磨子命名
新案 カチューシャリング

(入箱美便)付=組一

ドルラメニ (石黄緑)	ヤイアフサ (石黄青)	ーピル (石黄紅)	
價 定			
銀 錢 五 十 三 圓	金 錢 十 七 圓	金 錢 十 七 圓	銀 錢 十 七 圓
ズ準=レ之能共 錢二十地内 料送			



今日はルビー、明日はサファイヤと石を取替へて用ゆる事の出来る指環です。即ち普通の指環の石の嵌たる部分に穴を穿ち、石の下方には各々足を附しネジにて取附るので誰にも容易に出来ませり而して其技術の巧妙な事は絶體です。

図 1-3-12
カチューシャリング
田中健三郎商店
大正 4 年 6 月 『婦人世界』

ベルトリング

西洋で流行していたベルトを模した18金製のメッシュ状のリングも作られた(細い金線を網目織りしたものか、網目の模様を施したもののかは不明)(図1-3-13)。ベルト金具がデザインのポイントになっている。価格は12円。大正8年には甲丸をアレンジしたベルトリングも大阪で売り出されている(図1-3-14)。



図 1-3-16

編み込み指輪

天賞堂

大正 4 年 4 月『天賞堂営業

案内—貴金属装身具之部』

より

編み込み指輪
丸線の地金の上部に編み込みを入れて作った天賞堂の普段使いの指輪（図 1-3-16）。引き結び形指輪と同じ手法で作ったもの。18 金製で 5 円 50 銭。



図 1-3-15

擦り出し指輪

天賞堂

大正 4 年 4 月『天賞堂営業

案内—貴金属装身具之部』

より

擦り出し指輪
甲丸の表面をヤスリで擦り出してカットリング風にシャープに仕上げた普段使いの指輪（図 1-3-15）。18 金製で 5 円。



図 1-3-13

ベルトリング（メッシュタイプ）

天賞堂

大正 4 年 4 月『天賞堂営業案内—貴金属装身具之部』より



図 1-3-14

ベルトリング（甲丸タイプ）

松屋

大正 8 年 9 月 5 日『大阪

毎日新聞』より

伸縮印台指環

指の関節の部分の節が**太い**男性向けの印台形指輪で、村松合資会社の実用新案品（**図1-3-17**）。18金製プラチナ交りで、価格は**5**〜**5**円**50**銭。
座と腕の接合部がバネ仕掛けになっていて、指に入れる時は右図のように開き、閉じると左図のように一体化するように工夫されている。



図1-3-17
伸縮印台指環
村松合資会社
大正4年6月『村松品報』第7号より

結婚記念指環（ギメルリング）

ヨーロッパで、中世に流行した2つの輪を組み合わせると一体になる「ギメルリング」と呼ばれる「愛の指輪」も売り出された（**図1-3-18上図**）。**18金製で価格は6円〜8円**。

同時に、握り合う「フェデリング」から着想された**金製と銀製の結婚腕輪も売り出された**（**図1-3-18下図**）。**金製は31円、銀製は5円50銭**。

腕輪はその後作られなくなったが、ギメルリングは評判が良かったようで、その後も大正8年頃、大正10年頃と作られ続けた。**図1-3-19**は大正後期のギメルリング**広告**。作りが分かりやすいので、ここで紹介しておく。

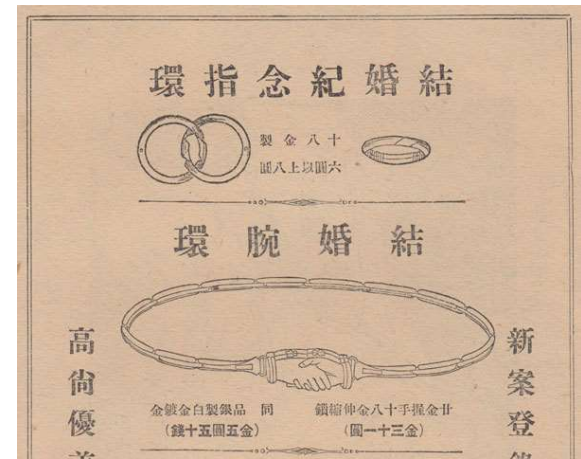


図 1-3-18
結婚記念指環（ギメルリング）と結婚腕環
日廻家本麿
大正 6 年 2 月『演芸画報』より

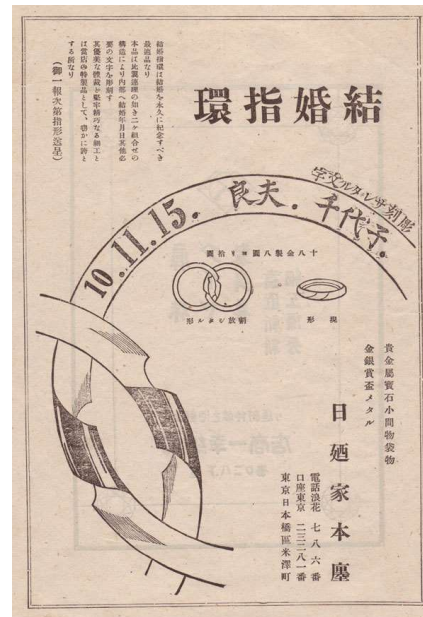


図 1-3-19
結婚指環（ギメルリング）
日廻家本麿
大正 10 年 9 月『演芸画報』
シンプルだが手間は大変なもの
だったろう。

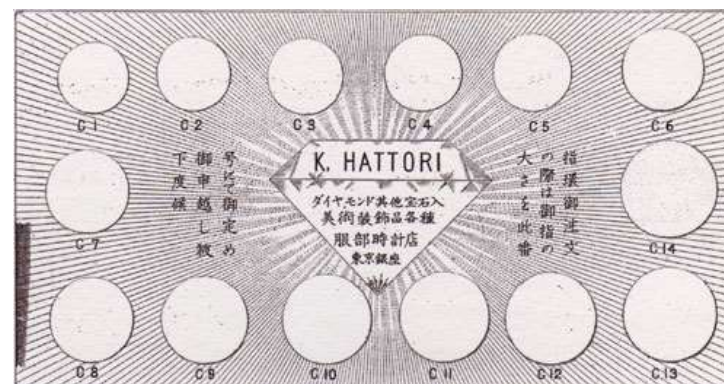
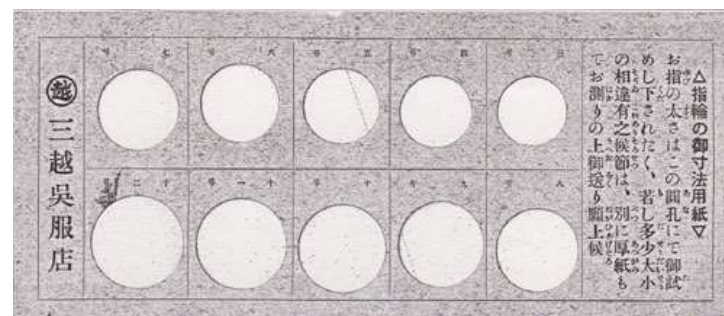
（コラム 1-12）
紙のリングサイズ

このように、大正前期にはさまざまな指輪が売り出されている。にもかかわらず当時はまだ統一された**金属製のリングゲージ**がなかった。そのため通信販売で注文する場合は、「楽譜の指環」(図 1-3-6)の広告文中に見られるように、紙を指に巻き合わせて印を付けて送るか、また、各店が**独自**に作った寸法用紙を送ってもらい、それで注文するなどの方法がとられた。

寸法用紙が**一般化した**のは大正六年前後のこと。**三越**には**三越の、服部には服部の紙製の寸法用紙があった**。御木本真珠店でも大正六年に紙製の「ミキモト・リングサイズ」を作り配布している（「鏝のあゆみ(4)」）。

組合（東京貴金属品製造同業組合）によって統一され

た指輪サイズ(寸法)が定められ、金属製のリングゲージが出来たのは大正9年頃からである。



紙の指輪寸法用紙

上は三越用、下は服部用

いずれも厚紙製。